

「みのり」という、太陽を失って

築地 秀将

二〇〇二年九月九日、みのりは我が家の一員になってくれました。四人目の子どもで、兄弟たちも大喜び。兄弟たちはとても可愛がり、我が家は、より華やかになりました。秋に生まれ、**宝物が実った**”と云うことから、「みのり」と名付けました。みのりは、私たち家族に絶え間ない笑いと安らぎを持ってきてくれました。小さい頃から活発で、人懐っこく、持ち前のコミュニケーション力で、誰ともすぐ仲良くなれます。近所の方にもすごく可愛がってもらいました。お話しするのも好きで、一旦話し出したら止まらないほです。そして、友達や家族の誕生日、父の日、母の日、敬老の日などには、必ず、プレゼントを用意してくれました。中三の修学旅行の前には、「不登校の子が修学旅行に参加できるようにと、ずっと寄り添っていた」ということを先生が教えてくれました。

みのりがまだ小さいころに私たち夫婦は離婚してしまいました。母親や兄弟たちと離れて暮らす、そんな辛い思いをさせてしまいました。そんな逆境にも負けず、明るく、元気で、素直で、誰とでも仲良く、そして、気配りができ、皆から愛される優しい子に育ってくれました。

みのりには、**”看護師になる”**という夢がありました。この夢に向かって、毎日、勉強を頑張り、入試直前まで悩んで決めた高校。頑張って、頑張って、頑張って勝ち取った「合格」に、本当に涙して喜んでいました。そして、これから始まる高校生活に、夢と希望で満ち溢れていました。中学からの心友、新たに加わった高校の心友たちと友達の輪が広がり、JK生活を、とても満喫していたようです。性格はと

ても明るく、人の世話をするのが好きな子でしたので、とても良い看護師さんになれたのだらうなと思います。

みのりは高校二年生になり進路ごとにコースが分かれ、いよいよ看護師になるという夢に向けて本格的なスタートを始めようとしていました。

でも、その時は突然やってきました。

二年生の始業式の翌日、二〇一九年四月六日の土曜日の朝です。この日、みのりは学校が休みで、出掛けるところだったようです。私は仕事に行くため、ちょうど支度をしているところでした。すると、自宅の電話が鳴り、出ると警察官からでした。内容は、「娘さんが事故に遭われたので県立総合病院に行ってください」とのことでした。怪我について聞いても、「病院で確認してください」と答えてくれず、とにかく病院に行くようにとのことだったので、すぐ病院へ向かいました。電話があったのが九時頃だったと思います。病院に着いたのが九時半頃だったと思います。

前日からみのりは、母親の家にいたので、病院に向かいながら、「母親の家の近くは狭い道路が多いから出合頭に少しぶつかってしまったのかな?」とか、「病院に行くというくらいなのだから、骨折くらいしちやったのかな?」などと、心配ではありましたが、「死」などは全く考えてもいませんでした。そして、病院に向かう途中、事故の現場の交差点を通りました。道がやけに渋滞していて、トラックとパトカーが止まっているのが見えたので、「あつ、こんな所でも事故をしているんだ」と、まるで他人事のように通過しました。でも、まさかそこが娘の事故の現場だったなんて! 娘が死んでしまっていたなんて! 全く思いも寄りませんでした。

病院に着いてからもなかなかみのりに会わせてもらえず、「少し様子がおかしいな」と思いながらも、この時も「死」ということは全く考えていませんでした。十五分か二十分くらい待ったでしょうか。ようやく先生が来て、「手の施しようがありませんでした。」というようなことを告げられました。そして、処置室に連れて行かれました。そこには、みのりがまるで眠るように横たわっていました。外傷はほとんど無く、本当に眠っているようでした。

「みのり、みのり！ 起きようよー」

「起きろよ！ 起きてくれよ！」

「目を開けなよ！」

と、病院のベッドに横たわっている姿に何度も何度も声を掛け、体を揺さぶったりしましたが、目を覚ましてはくれませんでした。

前日の夜には、新学期の書類を受け取るため、母親のところに行ったみのりと会い、少し話しました。そして、それが元気なみのりに会えた最後となってしまいました。昨日の夜はあんなに元気だったのに、「明日この書類届けるよ」と、約束していたのに。私は、目の前の事態を素直に受け止めることができず、ただただ、「嘘であってほしい」、「信じたくない」という気持ちで、ずっと心の中を駆け巡っていました。笑われるかもしれませんが、この時は本当にドクターXに助けてもらいたいと願いました。「全財産投げ出しても」、「残りの人生どんなことでもするから」、「みのりを早く助けてほしい」と、願いました。でも、そんな願いは叶いませんでした。

二〇一九年四月六日午前十時七分、重傷胸部外傷で天国に旅立ってしまいました。

私からの連絡で駆けつけた母親や長男、長女、次女たち。ニュースを聞いて駆けつけてくれた、みのりの友人や近所の方々も、ベッドの上で眠っているみのりを見て、ただただ泣くことしかできませんでした。

その日の夕方に、みのりは家に帰りました。みのりが家に帰ってからお葬式の日まで、私はみのりの横で寝起きしました。「パパ、何してるの?」と言って、起きてくるのを願っていました。でも、そんなことは起きませんでした。

お葬式には小雨が降っていましたが、同級生や友人、恩師をはじめ、三百人を超える人が来てくれました。こんなに多くの人たちから慕われていたなんて感謝でいっぱいです。そして、親の私が言うのもおこがましいのですが、それは、みのりの人柄の良さなのだと思います。本当に優しく素直に育ってくれて、皆の太陽のような存在だったんだと思います。そして、このような多くの人たちに悲しい思いをさせてしまい、本当に申し訳なく思っています。

事故によって太陽のような存在だったみのりを失い、私たち家族は皆、深い悲しみに包まれ、まるで暗闇の中にいるようでした。さらに悪い知らせがありました。お葬式の後、自宅のある神奈川に帰った長男も、まるで、みのりに寄り添ってあげるかのように天国へ行ってしまいました。お葬式からわずか四日後でした。みのりの事故との因果関係は分かりませんが、みのりのことをとても可愛がっていたので、大切な妹を突然失った悲しみ、悔しさ、絶望感など、何らかの影響があったものだと思っています。私たち家族は大切な命を二つも失ってしまいました。兄弟たちは、皆、仲が良かったので、残された姉妹二人が受けたそのダメージは、計り知れないものでした。私も母親も、この子たちにまで何かあったらどうしようと、不安と心配でたまりませんでした。

私も半年位は、仕事ができませんでした。仕事柄、毎日のように子どもたちと触れ合うのですが、悲しみの中、可愛い子どもたちの無邪気な笑い声を聞いたり、抱っこしたり、手を握ったりと直接触れ合うと、その感触、ぬくもりで、みのりのことを思い出してしまい、悲しみが増し、耐えられなくなってしまったからです。今は何とか復帰しましたが、それでもかわいい子どもたちと過ごしていると、毎日のように、みのりのことを思い出し、つつい涙が出てしまいます。

事故は、新東名の新静岡インターから流通センターに向かうT字路の交差点で起きました。青になって横断歩道を渡り始めたみのりは、左折してきた大型トラックに轢き殺されてしまいました。横断歩道手前での一旦停止と周囲の安全確認を怠ったトラックは、みのりにぶつかった後、その体を乗り越えるまでぶつかったことに気づいていません。さらに、周りの人たちから指摘されるまでどこにぶつかったのかさえ分かっていなかったようです。警察官からは、「みのりは、ちゃんと青信号を渡っていたこと」、「事故の相手を逮捕したこと」また、「相手は横断歩道周辺の安全確認が足りなかった」などの説明を受けました。みのりに落ち度はないと思います。

後の裁判で、左折なのに右側ばかり気にしていたこと、カーナビがテレビ画面になっていたことが判明しました。さらに、言い訳にしか聞こえないのですが、「歩道が広すぎて確認しきれない」とか、「かなり手前からみのりの姿を確認していない」などと供述していました。でも、危険なトラックを運転しているという自覚と責任をもって、もっと周りに注意してくれていたなら。横断歩道の手前で一旦停止しなくて良かったら。ぶつかった瞬間すぐに気付いて止まってくれていたなら。少なくとも命を落とさずに済んだのではないかと悔しくてたまり

ません。凶器がたまたま車だったから交通事故と言われていますが、遺族からしたら、これは運転手の注意不足、安全運転の意識の欠如によるれっきとした殺人だと思っています。

刑事としての犯人への処分は、「懲役一年六月、執行猶予三年」と、遺族の願いが届かず執行猶予付きの判決になりました。このことについては、弁護士さんなどからも言われていたので、ある程度覚悟はしていましたが、本当に悔しくて仕方ありません。

執行猶予というのは普通に生活していれば、刑に服さずに終われます。普通の生活をするというのは当たり前のことなのに、人ひとりを殺しておきながら普通に生活をしていけば罰が与えられないのです。交通事故は殺意がないという考えからです。でも、人を殺してしまっているというのは事実です。刑務所に入って、しっかり罪を償ってもらいたかったです。日本には性善説というものが根付いていて、なかなか厳罰が与えられないようです。性善説というのは、人間の本性は基本的に善であるという考えです。だから罰を与えないのではなく、だからこそ罰を与え、ちゃんと罪を償うことの方が、『善』につながるのではないのでしょうか。

さらに、犯人から全く謝罪がないどころか、「許してくれるなら謝りに行く」などと、自分のやったことをわかっていないような発言と、保険会社の全く誠意のない対応、冷たい対応で、民事裁判も起こさなければならなくなってしまいました。これには、事故に加えて二重三重の苦しみを与えられました。残念なことに、この判決も、相手の主張が認められてしまいました。相手は大型トラックで、しかも、周囲の安全確認を全く行っていないなかったのに。それに対して、ちゃんとルールを守って青信号で横断歩道を渡っていたのに、ただ、『自転車に乗っている』というだけで、過失を取られてしまいました。これはみのりを侮辱しているようで、本当に悔しくてたまりません。

結果、犯人は、実質的な刑事罰は無いに等しい。損害賠償だって保険屋が払う。免許だって、再取得できないのは一年間だけ。裁判中はあれほど「大型免許は二度と取らない」と言っておきながら、平気で取っている。犯人には、何の痛みも苦しみもないのです。被害者遺族はずっと悲しみや苦しみ背負わされるのに、犯人は数年も経てば普通の生活に戻れてしまいます。

みのりには、まだまだやりたいことがいっぱいありました。夢と希望に満ち溢れていました。それらを一瞬にして奪われました。そして、残された家族や友人たちは死ぬまで消えることのない深い大きな傷を負わされてしまいました。二分の一成人式に招待してくれたみのり。本当の成人式の晴れ姿を楽しみにしていたのに、それはもう叶いません。看護師になって活躍している姿も見ることができません。花嫁姿を見ることもできません。孫を見ることもできません。この切なさ、悲しみ、苦しみをこの先、何年、何十年もずっと背負っていかなくてはならないのです。みのりも私たち遺族も、命や一生をかけて償わなければならないような罪を犯したわけではないのに、本来、助けてもらいたい被害者や遺族には厳しく、加害者には優しい。これが日本の司法の現状です。

私は、事故の二日後の月曜日から約二年間、事故の起きた交差点で、通学時間に合わせて旗振り活動を始めました。その日は、ほとんどの学校が本格的に新学年をスタートする日でした。みのりもそうになっているはずでした。旗振りを始めた理由ですが、何故そんなことを始めたのか、自分でもハッキリ分かりません。「子どもたちを交通事故から守りたい」とか、「交通安全を促すことで、みのりを死に至らしめた交通事故への怒りをぶつけている」などの思いもありますが、改めて振り返ってみると、家で眠ったままのみのりの傍でじっとしていると、悲しみに押し潰されてしまう。そんな悲しみの中、居ても立っても居られなかったというのが、本当の素直な気持ちだったと思います。

す。そして、一番は、そこを通る高校生たちに、みのりの姿を被せたからだと思います。

そんな旗振り活動の中で、嬉しい出来事がありました。それは、西濃運輸の方たちが、道路脇の雑草を刈ってくれたことです。歩道には雑草が生い茂っていて、初夏の頃には車から見えづらいくらいに伸びていたので、鎌で刈っていました。でも、あまりにも量が多くて困っていたところを、そこを通る自社のトラックの運転手からその状況を聞いていたそうです。そして、「行政に言っても、なかなかやらないから、うちの会社でやるよ」と言ってくれ、数日後には綺麗に刈ってくれてありました。これは本当に嬉しくて感謝いっぱいです。

私にとって、みのりはかけがえのない存在です。大事な娘を失ってしまった、辛く、悲しい気持ちは今でも全く変わっていません。むしろ、それが増していくばかりです。もうこの先、どれだけ良いことがあっても、心から笑える日は来ません。みのりは優しい子なのに、私はいつも怒ってばかりでした。敵しいことばかり言っていました。我慢ばかりさせていました。なのに、肝心なところで守ってあげることができませんでした。一人ぼっちで、とても怖い思いをさせてしまったことに、悔やんでも、悔やみきれません。

みのりとは小さい時からよく出掛けていました。公園や動物園、水族館、遊園地、温泉、キャンプなど。近所のコンビニなど、ちよつとした買い物にも付いてきてくれました。日本中、至るところに思い出が詰まっています。今でも車に乗るたびに、みのりが横に乗っていたことを思い出し、悲しみがこみ上げてきます。行ったことのあるお店や場所の近くを通るたび、悲しみがこみ上げてきます。「今度、行こうね」って楽しみにしていたお店や場所の近くを通るたびに、悲しみがこみ上げてきます。毎日のようにみのりのことを思い、涙が出てしま

います。今は、ただただ、みのりに会いたい。みのりといっぱい話をしたい。笑顔を見たい。抱きしめたい。みのりのいたあの時に戻りたい。ただ、それだけです。今、一人で出掛けるたびに、みのりがいた日々がどれだけ大切で、かけがえのないものだったのかを痛感しています。

みのりが生まれてきてくれたことで、十六年という短い時間でしたが、私は本当に楽しく幸せな人生を送らせてもらいました。みのりは、本当に感謝でいっぱいです。でも、本来なら楽しいはずの思い出が、今は、悲しい思い出になってしまっています。ただ、周りの方からよく、「そんなによくよしているよ、みのりに笑われるよ」とか、「みのりが心配するよ」とか言われたりします。いつまでも悲しんでいると、なかなか生まれ変わってることができないということも見聞きしました。だから、みのりに恥じないように、みのりとお兄ちゃんが早く生まれ変わるように、少しずつでもしっかり前を向いて生きていこうと思います。そして、楽しい思い出を取り返そうと思っています。

交通事故により、大事な娘の”死“を経験してしまったことで、より一層安全運転を心掛けるようになりました。車はとても便利な乗り物で、今の私たちの生活には欠かすことができないものです。そして、とても楽しいものです。でも半面、その使い方やルール、マナーを守らなければ、簡単に人を殺すことができる凶器になります。”クルマを持つ“ということは、拳銃を持つことと同じです。”運転する“ということは、引き金に手をかけていることと同じです。ハンドルを握る時は、危険な乗り物を運転しているという自覚と責任をもって、安

全運転を心掛けています。それから、人の命は、決して軽いものではないということを実感しました。一人の人間には、何十人、何百人、何千人の人が繋がっています。だから、自分の命はもちろん、他人の命も大切にしなければなりません。そして、後悔がないように、この一瞬一瞬を大切にしていこうと思います。

最後ですが、一つ、詩を紹介させていただきます。これは、今から二十年前にアメリカで起こった九一一同時多発テロで話題となったものですが、原作は、それよりも前に大切な子ども失ってしまった母親が書いた詩です。正に、今、私がずっと抱いている思いを綴っています。好きな人を、兄弟を、親を、大切な人を、思いながら読んでください。



現場に手向けられたお花

「最後だとわかっていたなら」

参考文献：(作) ノーマ コーネット マレック / (訳) 佐川 睦
サンクチュアリ出版

あなたが眠りにつくのを
最後だとわかっていたら

わたしは
もっとちゃんとカバーをかけて
神様にその魂を守ってくださるよう
祈っただろう

あなたが
ドアを出て行くのを見るのが
最後だとわかっていたら

わたしは あなたを抱きしめて
キスをして
そしてまたもう一度呼び寄せて
抱きしめたろう

あなたが
喜びに満ちた声をあげるのを聞くのが
最後だとわかっていたら

わたしは その一部始終をビデオにとって
毎日繰り返し見たら

あなたは言わなくても
わかってくれていたかもしれないけれど

最後だとわかっていたら
一言だけでも言い…
「あなたを愛してる」と
わたしは 伝えたら

たしかにいつも明日はやってくる
でももしそれがわたしの勘違いで
今日で全てが終わるのだとしたら、

わたしは 今日
どんなにあなたを愛しているか
伝えたい

そしてわたしたちは 忘れないようにしたい

若い人にも 年寄りにも
明日は誰にも
約束されていないのだということ

愛する人を抱きしめられるのは
今日が最後になるかもしれないことを

明日が来るのを待っているなら
今日でもいいはず

もし明日が来ないとしたら
あなたは今日を後悔するだろうから

微笑みや 抱擁や キスをするために
ほんのちよつとの時間を
どうして惜しんだのかと

忙しさを理由に
その人の最後の願いとなってしまったことを
どうして してあげられなかったのかと

だから 今日
あなたの大切な人たちを
しっかりと抱きしめよう

そして その人を愛していること
いつでも いつまでも
大切な存在だということを
そっと伝えよう

「ごめんね」や「許して」や
「ありがとう」や「気にしないで」を
伝える時を持とう

そうすれば
もし明日が来ないとしても
あなたは今日を後悔しないだろうから

